



MARUMO LIGHTING NEWS

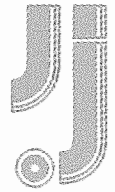


1998 JUNE

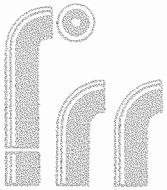
• VOL.82

- 俳優座劇場での高校演劇 ———— 遠藤 正義 ●照明家の言葉に触発されて ———— 松岡 和子
- 「WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '98」開催 ●MARUMOの光が活躍するホール・劇場 ●表紙写真=NODA・MAP公演「ローリング・ストーン」

俳優座劇場での高校演劇



—「はいすくうるドラマすぺしゃる」の舞台照明から—



遠藤 正義

(東京舞台照明)

フェスティバル形式の高校演劇

3月30日(月)から4月1日(水)の三日間、東京・六本木の俳優座劇場で、「はいすくうるドラマすぺしゃる」がおこなわれました。

この催し物は、高等学校の演劇部がフェスティバル形式で自分たちの作品を上演するもので、今回は六校の演劇部が参加しました。

高等学校の演劇部の活動は、県大会や地区大会、夏の全国大会を目標に作品を創り、稽古を重ねていくという形でおこなわれることが多いようです。しかし、この催し物は、そうした大会での審査員による評価を離れて作品を上演してみたいということから、演劇部の活動に熱心な顧問の先生方の努力によっておこなわれているものです。

この催し物の開催にあたっては、主催されている俳優座劇場のご好意で会場が提供されていますので、歴史ある俳優座劇場の舞台に立つ生徒たちにとっては、何よりの思い出になるものと思われまふ。特にこの時期は、春休みということで、卒業式を迎えた三年生にとっては最後の部活動になり、下級生にとってはバトンタッチを受ける公演となるのですから、自然と熱のこもった舞台が展開されることとなります。

この公演で私は、生徒たちによる上演をサポートする舞台照明のスタッフとして、生徒たちが考えてきた照明プランを実際に舞台の上につくっていくという仕事を担当することになりました。

できるだけ生徒たちの要望を実現するように心がけて取り組んでいきましたが、プロの劇団の舞台照明に携わっている普段の仕事とは違い、思わぬ生徒たちの発想や要望にびっくりしたり、感心したり、楽しい体験でもありました。また、一方ではもう少し照明につ

いての知識があれば、もっと効果的な舞台になるのではと思ったところもありました。

ここではそうした印象やそこで感じたことを、いくつか紹介していきたいと思います。これからの舞台づくりの参考にしたり、舞台照明について多少なりとも関心と理解を深めていただければと思います。

仕込図について

まず、公演の1週間前に最初の打ち合わせがありました。

これは、俳優座劇場でおこなわれたのですが、生徒たちに実際に劇場をみてもらったうえで、照明、音響、舞台監督などのプロのスタッフと生徒たちが初めて顔を合わせ、打ち合わせをおこなうものです。

私が担当した照明では、それぞれの学校の照明担当者が台本や自分たちでつくった仕込図やキューシートをもってきて、どんな舞台にしたいのかを説明してくれます。

私たちはそこで初めて、生徒たちの用意した台本を受け取り、仕込図やキューシートを見せてもらい、生徒たちのイメージしていることや要望を聞くことになります。

この段階で私たちは、生徒たちが希望する明かりをつくるためには、どこにどんな器具を仕込めばよいのかを判断しなければなりません。

特に、この公演では1日に2校の作品が上演されますので、二つの作品の仕込みをできるだけ共用できるように形にしたいと考えています。

ここで各学校からしっかりした仕込図が提出されると問題はないのですが、それぞれ自分たちの方法で舞台の平面図に丸印やスポットライトの記号を書いたものを見せてくれます。ある学校では、台本上にただ丸

を描いているだけのものが提出されたりしました。これでは、どんな明かりをつくりたいのか、どの位置に器具を仕込めばよいのかわかりません。そこで、生徒たちが書いた仕込図の意図を一つずつ確認しながら、生徒たちの考えていることを把握していきます。

たとえば、単サスの明かりをこのあたりに欲しいと舞台平面図上で説明してもらえれば、真上からの単サスでよいのかどうかを確認をして、大体のスポットライトの吊り位置を決めることができます。

照明の仕込図は、ある程度の知識や経験がないと書くことがむずかしいと思います。

まず一台のスポットライトが、どれくらいのエリアをカバーできるのかを把握しておく必要があります。それを基本にして、必要とするエリアを染めるためには何台のスポットライトが必要なのかを考えます。

また、スポットライトにもそれぞれ特性があります。最近よく使われているパーライトはフォーカスがなくて、

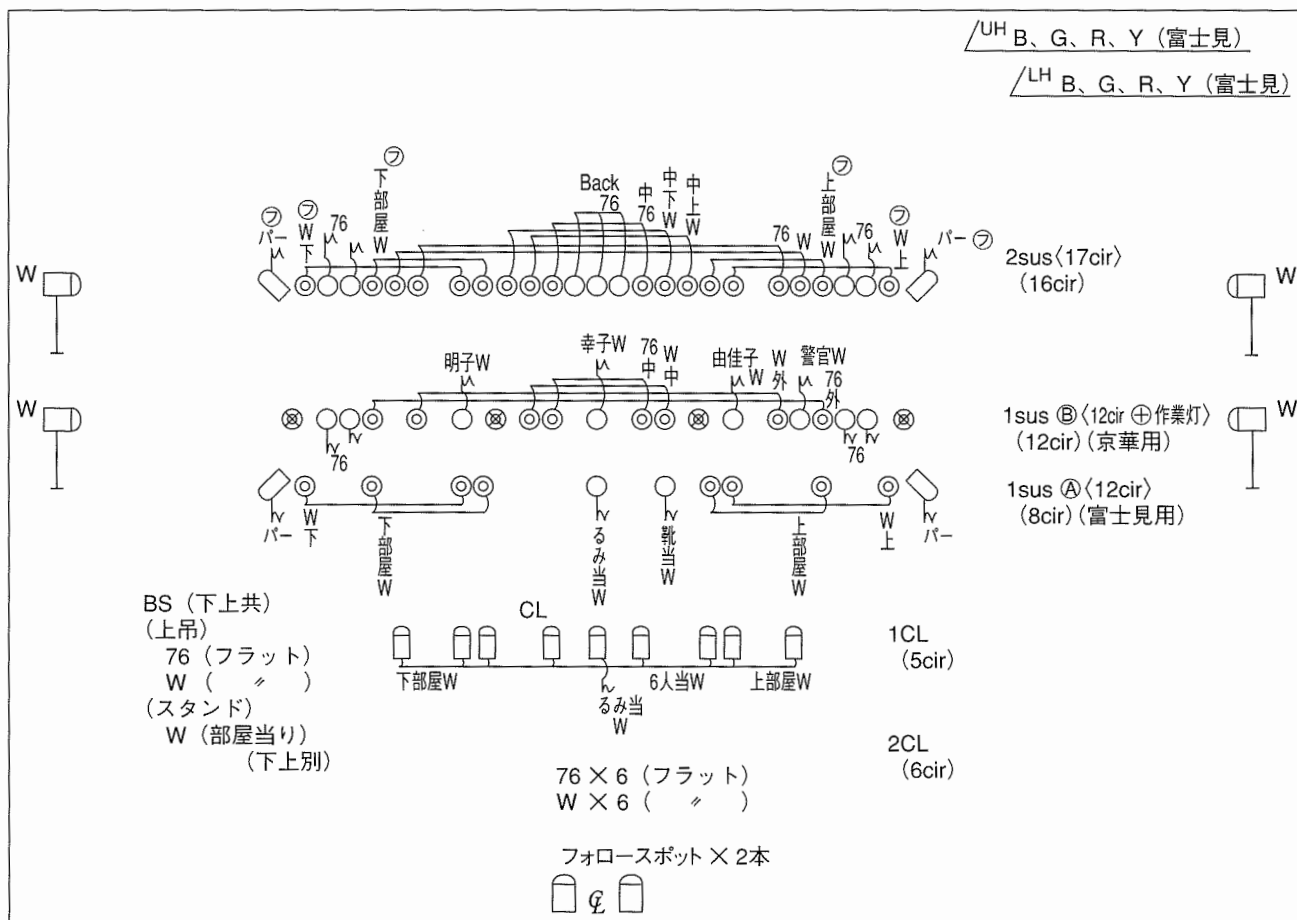
使用する電球によって明かりの広さが決まっていますから、器具を設置する高さによってカバーできる広さが決まってきます。そうした器具の特性やそれに適した使い方を知っておくことも必要でしょう。

私たちが実際に明かりのプランをつくる時は、さまざまな知識やこれまでの経験を生かしなが、舞台上どういう舞台装置が飾られているのか、そこで役者はどういう動きをするのかなどを把握して、どのエリアにどんな明かりが必要なのか、そのためにはどこにどんな器具が必要なのかを考えていきます。

高校生の場合は、そうした知識は充分ではなく、また劇場での公演の経験もないのですから、仕込図を用意してくださいという注文は無理なことでしょう。

そこで、私たちとの意志の疎通のために、「演技エリアはどこで、そのエリアに対してどの角度から、どんな色のトーンで明かりが欲しい」という言い方で要望が出されると、大体私たちの方でも判断がつくように

第1日目 京華高校と富士見高校の仕込図



京華高校『新編・ちょっと高校生』

センターからの明かりで、舞台の明かりをカバーするのではなく、シーリングやフロントなどの前明かりや、サスを使った上からの明かりで、エリアをつくるように心がけてください。3サスに◎76が仕込まれていましたので、これをもっと有効に使った明かりづくりが可能でした。たとえば、人物をシルエットで見せるといった使い方も試みると、面白かったのではないかと思います。

富士見高校『夏の風に乗って』

スモークマシンを使ったシーンで、パーライトが効果的に使われていました。単サスがトップサスになっていましたが、単サスの位置と角度を工夫することも考えてみてください。また、ステージスポットをもっと活用して、明かりの表現の幅を広げることにチャレンジしてみてください。花火をUHとLHで表現していたのは面白かったです。また、紗幕が使われていましたが、紗幕に舞台奥からタッチ明かりをつけるなど、紗幕を有効に使う工夫も欲しかったと思います。

思います。

さらに、基本的な事として覚えておいて欲しいのは、舞台の仕込みに関してはセンターラインが基本になるということです。舞台装置もセンターラインからどのくらいの幅で、どのくらいの位置に設置するかというように、センターラインを基準に考えていきます。舞台ではセンターラインが命なのです。私たちも仕込みを考える時は、まずセンターラインを確認し、そこから何間目にどんな器具を吊っていくかというように考えていきます。

普段の活動の中で芝居をつくる段階から、センターラインを設定し、そこを基準にして道具の位置や演技エリアを考えていくようにしていると、初めての舞台でもそれほど、とまどうこともなくなるでしょう。道具の位置や演技エリアがしっかりと把握できていれば、それに対する明かりをどうして欲しいのかというこ

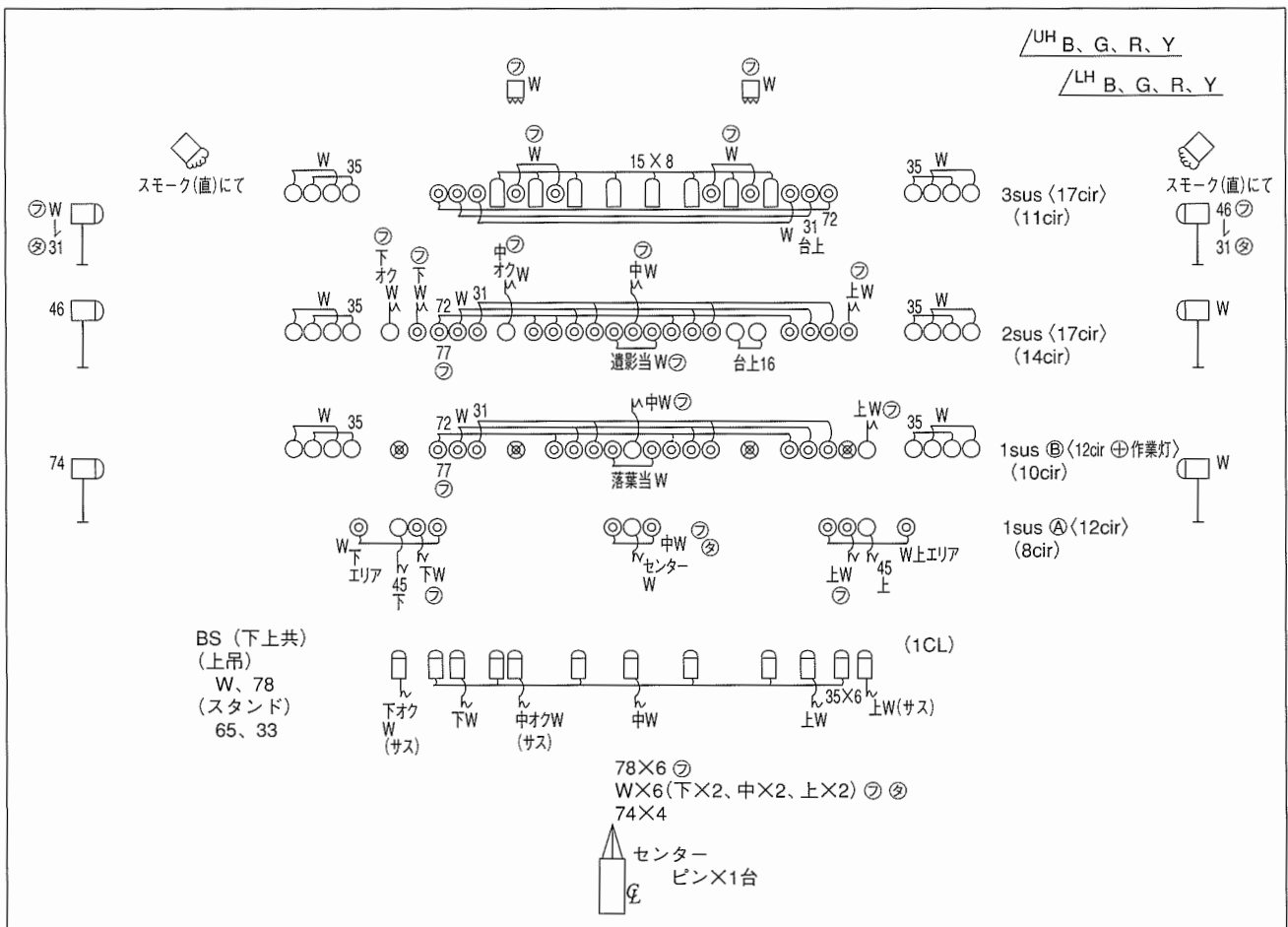
とも、うまく説明ができるのではないかと思います。

演技エリアを把握する

演技エリアをしっかりと把握することは、できているようで意外に不確かなことが多いようです。

今回の公演では安全性を考えて、実際の仕込み作業は私たちプロのスタッフがおこない、スポットライトを吊り、明かりをシュートをさせる段階で、その明かりでよいのかを生徒に確認してもらいながら明かりを決めていきました。ところが、照明担当の生徒自身が演技エリアをよく把握していないことがあり、指示に従って仕込みが終わり舞台稽古に入ったら、実際の演技がおこなわれているところが暗くなっていたり、その芝居をどう見せようとしているのかわからない状態の学校がありました。

第2日目 茨城県立藤代紫水高校と東海大学付属高輪台高校の仕込図



茨城県立藤代紫水高校『霧の落ち葉』

話の展開は面白かったのですが、照明としては演技エリアをしっかりと把握して、明かりを合わせて欲しかったと思います。舞台奥に置いたコロガシの使い方も面白いのですが、幕開きに使ってそのまま芝居が終わるまで置かれたままなのが気になります。真後に置かず上手、下手に分けて、道具の陰に置いたらどうでしょう。ステージスポットの使い方はとても面白かったのですが、バイクのヘッドライトを表現するときなど、ステージスポットを動かしても面白いのではと思いました。煙の使い方、落葉当ての効果はもう少し工夫が必要だと思います。

東海大学付属高輪台高校『希望ヶ丘包装場』

演技エリアをもっと適確に把握してシュートをして欲しいと思いました。転換明かりの#72の◎は必要ないでしょう。パーライトやピンの使い方も、もったいないように思いました。忘年会後の場面の明かりが中途半端だったので、上手のSSのみを40%ほどつけて、片明かりで若者と女性の顔に影を強調したタッチをつけて雰囲気表現しようとしたのですが、演じている生徒が明かりのなかに入ってくれないので困りました。

急遽、本番の時は、私たちの判断で明かりをかなり変更して芝居が見えるように直しました。もちろん、変更については生徒たちの了解を得てのことです。初めての舞台ということもあったのですが、自分たちの演技エリアを把握するというのは基本的なことだと思います。

演技エリアを把握するといってもそう難しいことではありません。舞台を前、中、奥と区切り、さらにその三つの区分を上手、中、下手と区切っていき、舞台全体を九分割して考え、登場人物がどの位置で芝居をして、どう動くのかを把握しておく、そこに明かりが必要なわけですから、おのずからどこに明かりをシェードさせるとよいかのかがわかってきます。

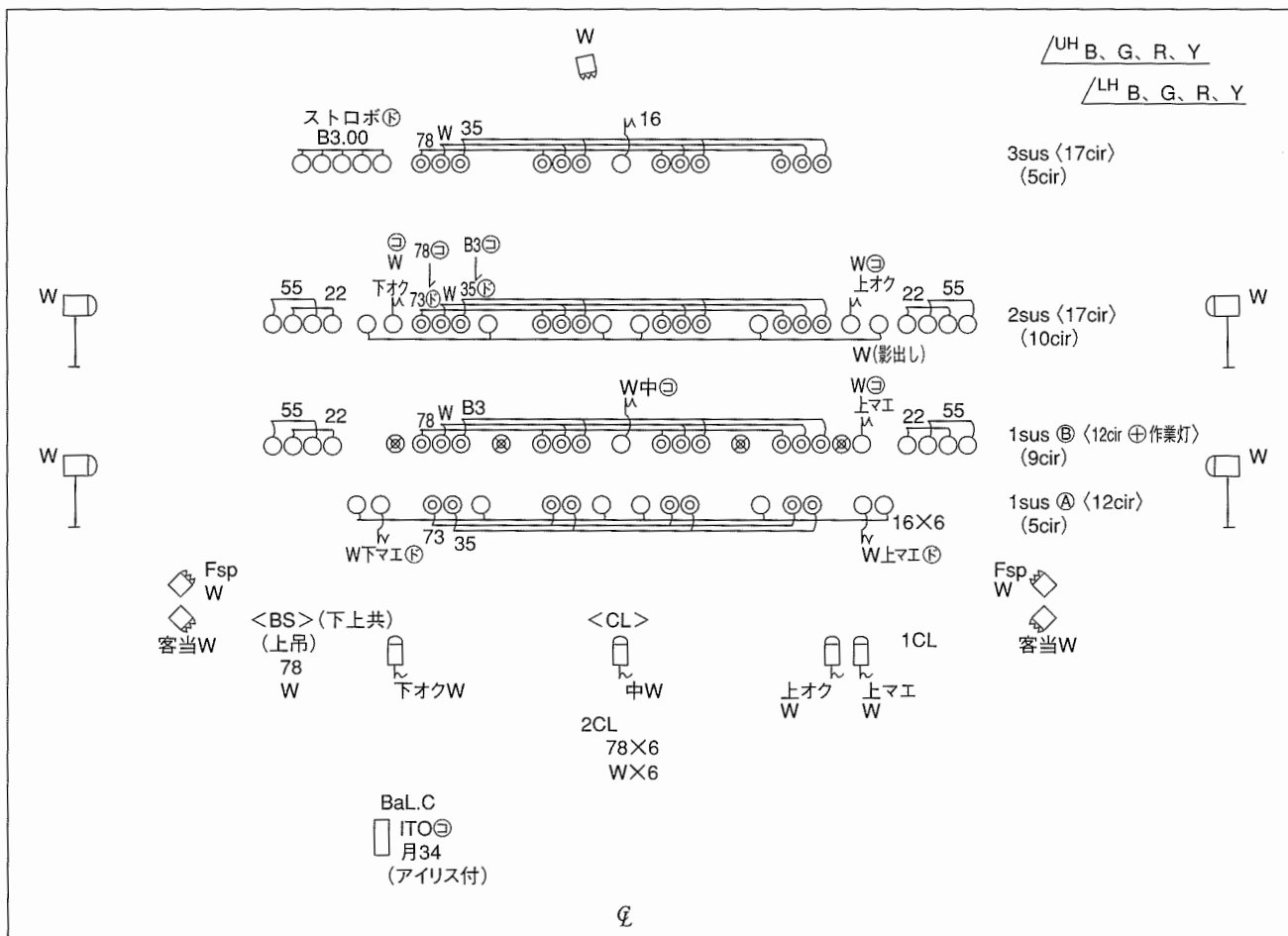
演じる生徒の方も、決められた演技エリアについてはきちんと把握しておいた方がよいでしょう。その演技を見せるために明かりをつくっていても、本番中に

生徒が演じながらその明かりの中から外れていくということも見られました。演じる生徒たちは、稽古の段階では、演技エリアや自分の位置を舞台上にバミったりして、何度も確認しているようでしたが、演技エリアをはずれたら、舞台全体にどういう支障が出てくるのかということまではよくわかっていないようです。また、自分の位置だけでなく、登場人物が数人いる場合は、それぞれが上手側、下手側に離れた時、自分の位置と相手の位置はどうなっているのか、また真中に集まった時、どのくらいの間隔でいれば、不用意にぶつかったりしないかなどといったような、相手との位置関係も把握しておくことが大切です。

色の使い方

生徒たちとの打ち合わせの時に、気になったことの

第3日目 筑波大学付属駒場高校と獨協高校の仕込図



筑波大学付属駒場高校『ある日、ぼくらは夢の中で出会う』

打ち合わせの時に「蛍光灯のような明かりにしたい」という要望がありました。そこで、#B3という色を仕込んでみました。イメージした明かりになったでしょうか。全体的にはフラットな明かりだけなので、もっと変化をつけてみる工夫が欲しいところ。月はあえて出さなくてもQだけの明りでも表現できます。ラストのトップサスはおかしいように思えました。Qで道をイメージさせる明かりをつくったらどうだったでしょう。ラストシーンは重要です。もっと考えて、とっておきの明かりをつくってください。

獨協高校『ごめんな西遊記』

一見ドタバタ喜劇風ですが、友情とか勇気といったテーマをしっかりと持って、話としても面白い舞台でした。芝居のテンポも、それに対するキッカケも良かったと思います。照明のプランとしては、芝居の内容に合わせて、もっと大胆に変化をつけてみるのも面白かったのではないかと思います。先生の方から顔を見せてほしいとの要望があり、フロントやシーリングからのナマ明かりを多用していましたが、歌の場面などは22、Q35、Q33のような明かりでも良かったのではないかと思います。

ひとつに色の選び方がありました。普段私たちが使わないような色を使いたいと希望してきた高校がいくつかあったのです。

芝居の中で特別な色がどうしても必要だということはありませんから、その意図がわかった時には、そのための色を特別に用意しなければなりません。

しかし、今回は horizont を染める色や、全体のトーンをつくる色に、あまり使用されていない色を希望してきました。

この時に感じたのは、生徒たちに色を混ぜ合わせるという発想がないのではないかということです。光の色を混ぜ合わせて、どういう色をつくっていくかということは、ある程度の経験が必要なことなので仕方ないのかもしれませんが。生徒たちは照明の色を単色で考えて色を指定しているようです。赤い色が欲しい時は、カラーフィルターの見本などを見て、そのイメージにあった赤い色を指定してきます。しかし、特別にその色のフィルターでなくても、それに近い色は色を混ぜ合わせることによってつくることができます。

たとえば、アッパー・ホリゾンライトでは、#71、#72、#63、#22、#78などの色を仕込んでおき、これらの色を混ぜ合わせることで、大体必要な色は表現することができます。実際に今回の公演でも、アッパー・ホリゾンライトとローア・ホリゾンライトには、ブルー、グリーン、レッド、イエローの4色を用意し、この4色を混ぜ合わせることで、六つの学校の要望に応えていきました。

また、全体の明かりづくりでも、色を混ぜ合わせるという発想がないので、地明かりをつくる際にも、ブルーの時はブルーだけ、アンバーの時はアンバーだけというような作り方が多かったようです。ブルーの

舞台でも、そこにナマ明かりを混ぜることによって、トーンの違ったブルー舞台をつくることができます。

舞台照明の色の使い方について理解するには、ある程度の経験が必要になりますが、こうしたことがわかってくると、明かりづくりの幅も広がり、その面白さも深まっていくのではないかと思います。

真上からの単サス

それぞれの舞台を観ていると、全体の明かりのつくり方として、比較的舞台全体を明るくする地明かりと、その中に狭い明かりのエリアをつくる単サスを落とししていくという構成が多かったようです。

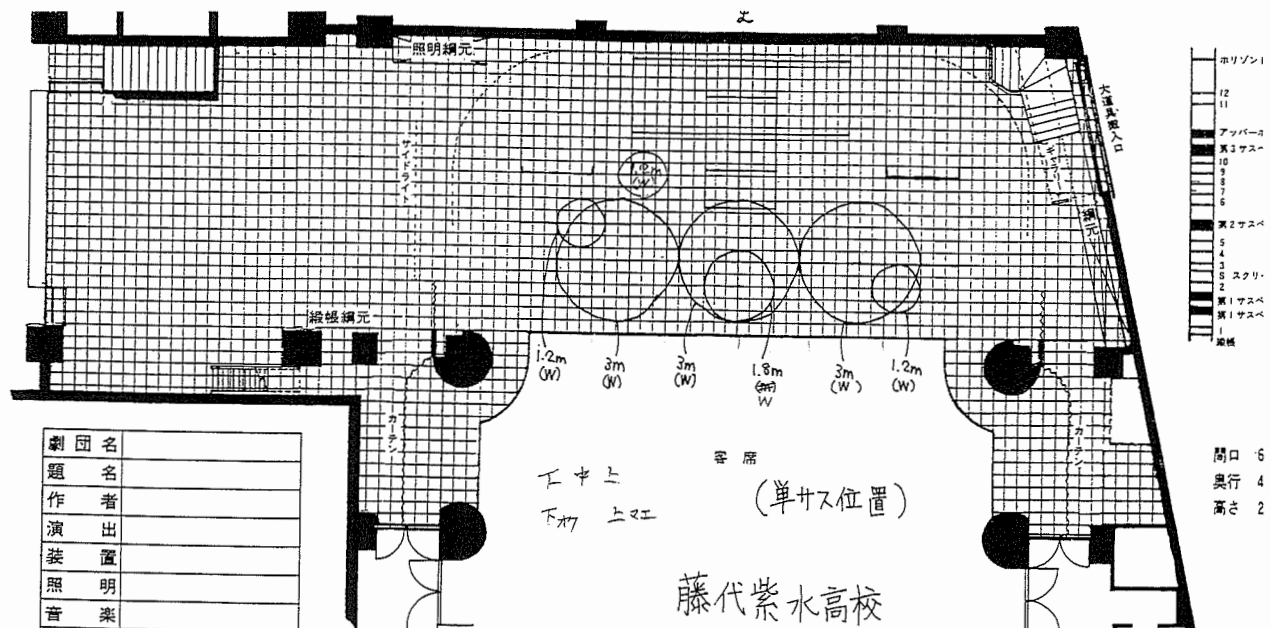
この単サスの使い方であつたのが、どの学校でもなぜか人物の真上からの単サスになっていることでした。

単サスというのは、人物に対していろいろな角度から明かりを当てることのできる器具の使い方です。単サスならではの効果表現を試みがあつてもよかつたのではないのでしょうか。たとえば、人物の片方から当ててみて、反対側に影をつけるとか、少し後からバック気味に当てて、顔の表情が見えなくても、影を強調したシルエットで見せるとか、面白い効果を出すいろいろな方法があります。単サスは真上からという決まりがあるわけではありません。人物に対して、いろいろな角度から単サスを当ててみて、もっと自由に単サスの効果を使って欲しいと思います。

後からの明かり

また、全体の明かりのつくり方を見ても、前方向

生徒から提出された資料。舞台平面図に地明かりのエリアと単サスの位置が指定してあります。



(シーリングライトやフロントサイドライト)や横方向(ステージスポットライト)、上方向(サスペンションライト)からの明かりだけで構成されているようで、後からの明かりの発想がないように思いました。バックサスの発想です。

前や横や上からの明かりだけで構成されていると、どうしても人物が浮き上がってこないという印象を受けます。人物がフラットに見えてしまい、存在感が見えないのです。

これは、中割幕を使って舞台の前の方に演技エリアを設定し、舞台の奥まで使わない学校が多かったことも原因のようです。中割幕を使うと、使えるのは1サスと2サスまでになってしまいます。舞台の奥まで使うと3サスが使えますので、舞台の人物に対してバックからの明かりをつくることのできるのです。

後からの明かりについては、単サスのように一台で一人の人物に当てる場合もありますし、数台のスポットライトを使って、舞台全体に後からの明かりをつくることもあります。この後からの明かりで、人物の肩口あたりに輪郭をつくると、人物の見え方がずいぶんと違ってきます。これは単サスの使い方と同様に、一度実際に明かりをつくって確かめてみてください。

今回の公演では、ある高校から舞台前に並んだ六人の登場人物をシルエットで見せたいという要望がありました。この学校でも中割幕を使っていましたので、使えるのは1サスと2サスだけです。1サスだとほとんど人物の真上になります。かろうじて2サスからの明かりで、シルエットを出すように仕込みましたが、舞台を奥まで使って、3サスが使えらるともっと効果的なシーンになったのではないかと思います。

フォロー明かり

各学校とも真上からの単サスを使う場面が多かったと述べましたが、この時に問題になるのが前からの明かりです。真上からのサス明かりだけでは、登場人物の顔が見えにくくなりますので、前からの明かりが必要になります。

今回の公演では学校によって、表情を見せるための明かりをフォロー明かりで処理したり、シーリングやサスにツラ明かりのための仕込みをしたり、明かりの作り方がそれぞれ違っていました。

見比べてみると、やはりシーリングやサスからのツラ明かりをつくっていた方がきれいにみえました。

フォロー明かりを使うと、どうしても人物の後に影が出てしまいます。まして、フォローの操作に慣れていない生徒が初めて器具を扱うわけですから、どうし

ても操作がごちかなくなり、後の影が目立ってしまいます。

これはケース・バイ・ケースですが、今回の俳優座の公演では、劇場の空間の規模も考え合わせると、フォロー明かりよりもシーリングやサスからの明かりで表情を見せるように考えたほうが良かったのではないかと思います。そのためには、照明の仕込みも多少複雑になってきますが、安易にフォロースポットに頼らないという考えも必要だと思います。

ステージスポットライト

生徒たちの明かりづくりのなかで一番感心したのが、藤代紫水高校のステージスポットライトの使い方でした。

最初の打ち合わせで仕込図を見せてもらった時は、下手側の手前のステージスポットにはブルーを入れて、上手側には赤を入れてと、統一感のない色の使い方がされていました。

普通、ステージスポットは、上手・下手の色を合わせるようにして使います。ところが、この高校では、まったく違った色を仕込むように指定されています。さて、これをどう使うのだろうという興味があったのですが、実際に使い方を見て感心しました。

たとえば、下手側のステージスポットに仕込まれたブルーは、登場人物が下手側を向いてテレビを見ているという場面で、このブルーの明かりをテレビ画面からのハレーションとして人物に当てていたのです。また、上手側の赤は暴走族のオートバイのヘッドライトの明かりとして、舞台に照射されていました。

舞台上には、テレビも暴走族のオートバイも登場させず、ステージスポットからの明かりを使うことで、その表現をおこなっていたのです。

高校演劇の場合、本格的な舞台装置を組んだり、道具類を揃えることはなかなか難しいことだと思います。しかし、この高校の発想のように、照明の使い方によってそうした問題をカバーすることができるのです。私たちにとっては、意外なステージスポットの使い方でしたが、とても優れた表現になっていたと思います。

器具の使い方について

よく普段の活動などでも機材が足りないとか、予算がないといったことを耳にしますが、今回の公演を見ると、そのわりにはもったいない器具の使い方をしているなという印象を持ちました。

たとえば、パーライトなどはスペシャルとして効果

的に使うと面白い器具です。実際に、今回も光のビームを効果的にきれいに使っていて感心した舞台もありました。しかし、パーライトでなくてもよいのではないかという使い方があったのも事実です。

全体の傾向として、器具を使いこなしていないという印象があります。少ない機材だからこそ、普段からその特徴をしっかりと把握して、使いこなしていくという姿勢が必要ではないかと思えます。

ある学校でフォローピンを使いたいという強い要望があり、準備をしたのですが、実際の使い方を見てみると、1時間の芝居の中で2回ほど使っただけで、しかもどうしてもそこにフォローピンが必要だとも思えませんでした。

また、ある学校から月を出して欲しいという要望があり、そのための器具を用意し、水平線に月を出すことにしました。しかし、この月を出すことが本当に芝居の中で不可欠だったのか、考える余地があるように思いました。月そのものを出さないで、月明かりで表現することもできます。この場合、明かりで観客に月のイメージを喚起させるわけですから、明かりのつくり方は難しくなります。しかし、それがうまくいけば実際に月を水平線につくるよりも深い表現になったかもしれません。観客にどうイメージを喚起させるか、そこに明かりづくりの醍醐味があるように思

います。

どんな器具を選ぶかは、何をどう表現するかということと密接に関係しています。そこで何を表現するのか、その表現に対して器具の選択はベストなのかを、もう一度考えてみてください。

効果器を使う

今回の公演では、二つの作品でスモークマシンが使われていました。

煙が立ち込める舞台は、独特の雰囲気がありますので、こうした効果器は機会があれば使ってみたくと考えている生徒たちも多いと思います。

しかし、スモークマシンを使う時は、光線がどう見えるのかを計算しなければなりません。煙が出ている舞台上で、計算されていない光線が走っていると、舞台全体がきたなく見えてしまいます。きたないばかりでなく、それが気になって観客の方は肝心の芝居に集中できなくなります。

富士見高校の舞台では踊りのシーンにスモークを使っていましたが、煙の中にパーライトの光線を効果的に使っていました。左右からの光線の角度と色のバランスがきれいに整っていて、非常にセンスの良さを感じさせるシーンになっていました。

調光室に持ち込まれていたキューシート。FI、FO、COなど、キッカケと明かりの入れ方、消し方が丁寧に書き込まれています。

上演団体名 筑波大学附属駒場高等学校

題名 ある日僕らは夢の中で出会う

10年4月1日(水) 15:30~ No. —

Q	P	SCENE	FILTER	LIGHT		UH		LH		IS			2S			SS		FR		CL	
				SUS				地明かり	カトウあり	地明かり	上手奥	下手奥	月	上下2							
				TYPE				◎	◎	○	◎	◎	○	○	☒	☐					
				74		74	44	W	78	W	W	78	W	W	34	W	W	78	W	78	
1	2	幕あき																			
2	2	カトウはける																			
3	2	4人の役者 板についた						FI 100	FI 80			FI 100	FI 80				FI 100	FI 80	FI 100	FI 80	
4	11	行くぞ						CO	CO			CO	CO				CO	CO	CO	CO	
5	11	4人の役者 準備ができた						FI 80				FI 80					FI 80	FI 80	FI 80	FI 80	
6	20	カトウ きる						CO				CO					CO	CO	CO	CO	
7	20	3人の役者 準備ができた						FI 100	FI 80			FI 100	FI 80				FI 100	FI 80	FI 100	FI 80	
8	28	カワハラ 上手奥へ移動											CI 100								
9	31	カワハラ 舞台中央へ																FO		FO	
10	31	カトウ、ヤマモト ミウ 下手奥へ															FI 80	80		80	
11	34	カワハラ ゆっくり移動35分						FI 40				40					40	40		40	
12	34	カトウの叫び声						CO	80			80					80	80		80	

また、同じ富士見高校の舞台で印象に残ったのが、打ち上げ花火の表現でした。花火の効果音に合わせて、水平幕を鮮やかな赤や緑に染めて表現していました。通常は、エフェクトマシンなどを使って花火の模様を映しだしたりしますが、そういった手法はとらずに、水平幕全体を瞬間的に鮮やかな赤や緑に染めることで、強い印象を与えることに成功していました。

調光室のドラマ

調光室での照明操作は、私たちの方であらかじめデータをメモリーに組んでおき、生徒たちにクロスフェードで明かりの変化を操作してもらうという形でおこなっていました。自分たちでつくった芝居ですから、キッカケは生徒たちの方が充分把握しています。私たちが操作するより、より細やかな操作ができるはずです。本番中は私たちスタッフの一人がそばにいて、何かアクシデントがあった時には、すぐに対応できるような態勢で臨みました。

生徒たちがつくってきたキューシートをみると、それぞれのキッカケのところに「FI」、「FO」、「CO」などの指定が細かく記載されており、自分たちの芝居に対する思いが伝わってくるようでした。

操作卓の前に座った生徒は、それだけで緊張しているようでしたが、客電を落とすところから、芝居が終わり客電を上げるまで、慎重に、丁寧にフェードを操作していました。

このフェード操作で重要なことは、明かりの点き方、消え方がフェードの動きとどう連動しているかをできるだけ把握することです。自分ではフェードインのつもりで、フェードをゆっくり操作していても、実際には明かりがポンと点いてしまうなど、操作卓やスポットライトの特性で、自分のイメージしているように明かりが操作できないことがあるからです。私たちもツアー公演などで初めての操作卓を扱う時は、その操作卓の特性を早く把握するように心がけています。

調光操作で気になったのは、舞台袖にいる舞台監督から照明のキッカケがすべて出されていた学校があったことです。このキッカケの指示は同じように音響の方へも出ていたようです。これはスタッフの役割分担をどう考えるのかということですが、私の個人的な考えとしては特別のことがない限り、明かりのキッカケはオペレーターにまかせるべきだと思います。その方が、オペレーターにとってはずっとやりやすいはずですよ。

調光室で起こった高校演劇ならではの出来事で印象に

残っているのは、操作をミスしてしまい思わず泣き出した女生徒がいたことです。

私たちの場合は、前明かりが緞帳にかかることについては、ケース・バイ・ケースであまりこだわらないのですが、この学校では、芝居が終わり、緞帳が降りてきたとき、前明かりが緞帳にかからないようにしたいというこだわりがあったようです。オペレーターの女生徒は、上演中は慎重に、繊細に、見事に操作していたのですが、最後の最後にこの緞帳が降りる時に、シーリングの明かりを落とすタイミングが遅れてしまい、シーリングの丸い明かりの輪が緞帳にかかってしまいました。瞬間「あっ、やってしまった」と言ったまま、しばらく黙っていましたが、そのうちすすり泣きはじめてのです。自分のミスがよほどくやしかったのでしょう。後整理を終えて、調光室を出ていくまで泣き通して、それでも調光室を出る時には「どうも、ありがとうございました」と、泣き声混じりで挨拶をし、私たちにきちんと頭を下げていきました。舞台だけでなく、調光室にもいろいろなドラマがあった公演でした。

全体の印象

今回、六つの高校の作品を観て感じたのは、もっと大胆に、メリハリのきいた明かりづくりがあってもよかったのではないかということです。まだ、恐る恐る手探り状態でやっているような印象があり、せっかくのチャンスですから、もっと大胆に、ガッツをもって取り組んで欲しいように感じました。

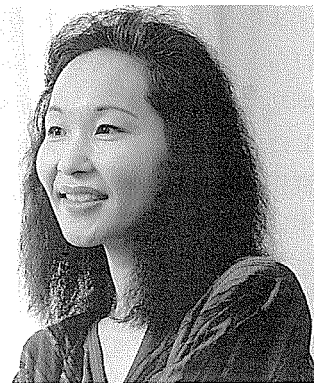
ある作品で、登場人物が実際にはすぐ傍にいながら、離れた場所にいるという設定の芝居があったのですが、観客には二人が違う場所にいるということが明確に伝わっていないように感じました。いろいろな手法で舞台を創っているのですから、それが観客に伝わるように明かりの面でもあいまいにしないで、かなりはっきりとつくっていく必要があると思います。こう見せたいと思ったら、思い切って大胆に明かりをつくってみて、そこから修正していくというくらいの考えでよいのではないのでしょうか。

台本の中で何を一番表現したいのか、どんな形でテーマを表現していくのか。まずそこをしっかりと見極め、そこで思い切った明かりづくりに取り組んでみるのです。また、照明の役割は本来は見せるということですが、光で何かを表現するというのも可能です。作品のテーマを効果的に表現していくために、思い切った明かりの創り方を試みてもよいのではないかと思います。

照明家の言葉に 触発されて



松岡 和子



ちょうど3年前、照明家の沢田祐二さんにインタビューさせていただいた。演劇雑誌『シアターアーツ』の「現場からの声」という連載インタビューの第3回目だった。

そのときのマクラでも言ったことだが、私が長年芝居を見てきて「照明」というものを強く意識するようになったきっかけは、沢田さんの仕事に関わっている。

そのインタビューの1、2年前だったろうか、舞台美術家の朝倉摂さんと女優の佐藤オリエさんが、マヌエル・プイグ作、ロバート・アッカーマン演出の『薔薇の花束の秘密』で紀伊國屋演劇賞を同時受賞した。そのお祝いの会が開かれ、私が司会を仰せつかった。さまざまな来賓の方にスピーチをお願いしたが、その一人が沢田さん。彼を紹介する朝倉さんの第一声が傑作だった。

「装置家なんていくら頑張ったって、明かりが入らなければただの真っ暗け」

私は、大笑いしながらも改めてなるほどと思い、以来T.P.T.の舞台をはじめとする沢田さんの優れた仕事のみならず、「照明」そのものも心して「見る」ようになったのだ。

このインタビューでは、沢田さんから「目ウロコ」もの示唆に富む言葉を数多く伺うことができた。

「演出にしろ装置にしろ、生かすも殺すも明かりっていうところがある反面、明かり屋さんによれば、どういう演出と装置に出会うかによって腕の揮いようが……」と私が水を向けると、沢田さんは深くうなずき「はっきりした演出のコンセプトと、それを具現した装置がないと、我々も腕の揮いようがない。演出家が何を考えているのか、どういう舞台を作りたいのかってことの中で一所懸命やるわけです」

また、「基本的なことを決めてから、それを具体的にしていくには稽古を見ていかなきゃならない。すべての始まりは稽古場からです」と仕事のプロセスを語り、大事なものは、本を読んだときのご自分のイメージと演出家との打ち合わせだ、とも言った。

照明とか音響はテクニカルな部分があり、テクノロジーの進歩発達によって今までできなかったことができるようになると、どんどんやりたくなるのが人情だろうが、沢田さんはそれを誇示する危険も十二分に認識していて、「(照明は)主張しすぎちゃいけないんですよ。あくまでもドラマの中に、むしろ埋没していかなきゃならないと思う」と言う。この言葉からは「照明への愛」を超える「演劇への愛」を感じたものだ。

つい最近、新国立劇場の小劇場で岩松了作・演出の『虹を渡る女』を観た。20歳も年齢をサバ読んで結婚した女が

主人公で、小さなペンションの主人であるその夫が、一年前に亡くなった妻を回想するという思い出の劇。だがこれは、視点をずらせば岩松版『三人姉妹』とも言える。男と彼の三人の姉妹との関係が、アンドレイとオーリガ、マーシャ、イリーナとのそれと微妙なズレを伴いながらもきれいに重なるからだ。

どんな近い間柄の人間同士にも嘘と秘密はある。この芝居における「年齢20歳サバ読み」というのはその極みである。彼女の嘘と秘密にとことん付き合おうとする男と、それを白日のもとに晒そうとする者たち、そのまま見守ろうとする末の妹らとの間の緊張の糸が、さりげない会話の裏にピンと張られている。

装置は島次郎、照明は小笠原純。刻々変化する明かりが演出と舞台美術に見事な明暗を与え、それ自体陰影に富むドラマと渾然一体となっていた。

とりわけ印象深かったのは、登場人物全員が一同に会し、亡父の愛人だった女性の遺産を巡ってぶつかり合う場面だ。外は小糠雨の夜、室内は明るく暖かい明かりに満たされている。そのコントラストは、屋内のヒートを天からの雨が冷ましているようにも見えるのだった。

また、夜の虹の鮮やかさも忘れがたい。舞台には誰もいない。キッチンになっているらしい奥の方から男の妻と、彼女の先夫との間の息子とのやり取りが聞こえるのみ。真っ暗な空に大きな七色のアーチ！

舞台の照明はあり得ないものをも目に見えるようにしてくれるのだと溜め息が出た。

幕切れに残像となって残るのは、プロセニウム＝額縁舞台に嵌められた文字どおりの「額縁」、上手奥の壁に掛かった額縁入りの女のモノクロ写真、そして、舞台の下手半分を占める庭に立つ風向計、その上に留まった白い鳥である。沢田さんは、一杯舞台の場合は特にフェイドアウトのタイミングをゆっくりしたり、速くしたりに気を遣うというようなことも言っていたが、『虹を渡る女』の幕切れのフェイドアウトのタイミングは絶妙だった。

照明はまさに、ドラマの光と影を担うのだ。

最後に、もう一度沢田さんの素敵な言葉をご紹介します。「この世界だって太陽がひとつあってぱっと照らすから、影がきれいにひとつできるんです」

まつおか かずこ 翻訳・演劇評論家。英米の戯曲作品の翻訳を数多く手がけ、なかでも新訳のシェイクスピア作品は、新しい上演台本として高く評価され、銀座セゾン劇場や新国立劇場などで上演されている。1995年湯浅芳子賞受賞（海外戯曲翻訳・脚色部門）。翻訳書の他に著書として『すべての季節のシェイクスピア』などがある。

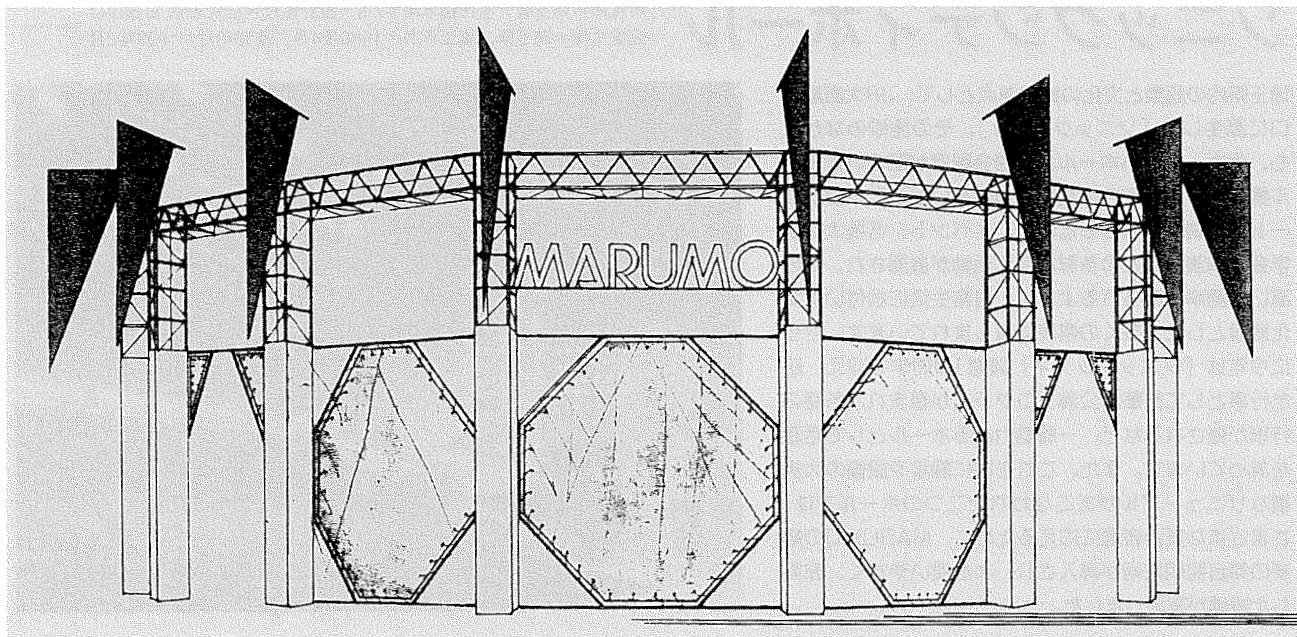
WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '98 開催

場所：パシフィコ横浜 展示ホール

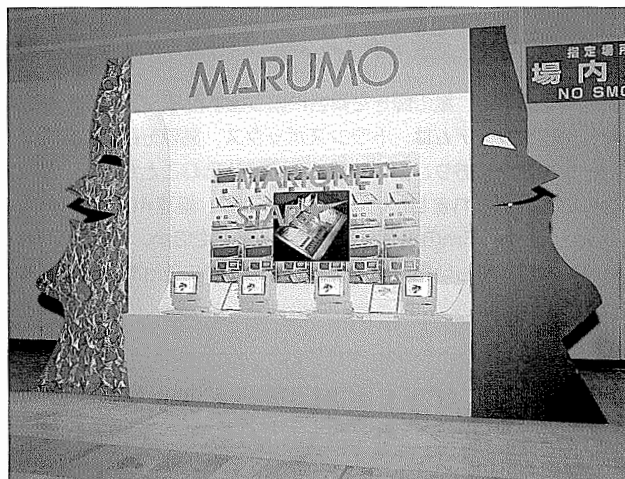
会期：平成10年6月18日（木）～20日（土） am 10:00～pm7:00
最終日6月20日のみpm5：00までの開催です。

エンターテインメントの総合展として、「人と技術の交流の場」をテーマに開催される、『WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '98』。光をモチーフにしたこの展示会に、丸茂電機は「RE-ACTION」をメインコンセプトに掲げ、展示ブースを出展します。今回の出展では、マルモU型調光装置に代表される一時代を画した丸茂電機の技術の確かさと、その歴史を振り返る一方、数多くのカスタムメイド製品を通して、舞台照明家の方々と共に研究を重ね、蓄積してきた演出照明に対する豊富なノウハウを紹介しします。さらに、この展示会では、今日急速に進歩しているテクノロジーを意欲的に取り入れた丸茂電機の最新技術として【MLCN (MARUMO LIGHTING CONTROL NETWORK)】の提案など、次時代の演出照明の在り方と可能性を視野に入れた展示をおこないます。80年におよぶ歴史を踏まえながら、新しい時代に向かって挑戦を続ける丸茂電機の姿を、『WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '98』のブースで、ぜひお確かめください。

『WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '98』の丸茂電機の出展ブースデザイン



1996年に開催された『WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '96』



サンプラザホール

所在地=東京都中野区中野4-1-1/設置主体=雇用促進事業団
竣工年月=1973年6月/改修年月=1997年10月

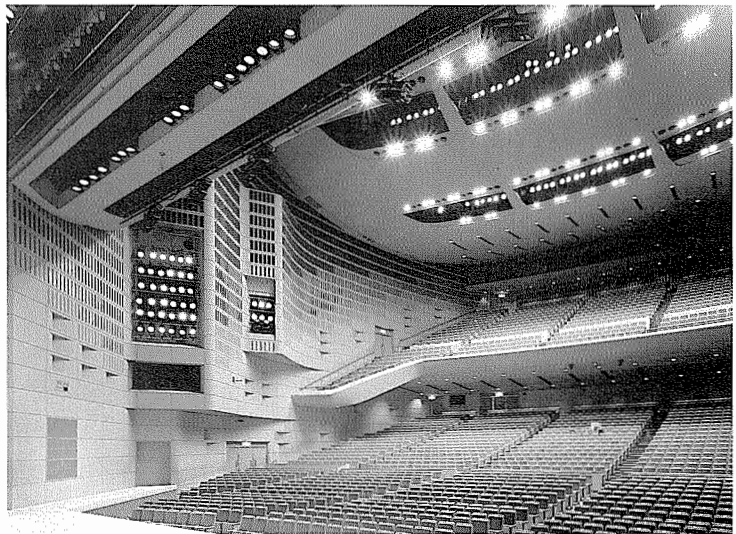
国内はもとより、海外のミュージシャンのコンサートや、モダンバレエの公演など、常にアグレッシブな舞台を展開しているサンプラザホールは、JR中野駅に近い利便性もあり、若者にかぎらず多くの人々に親しまれているホールです。このホールを利用するプランナーやオペレーターにとって、使いやすく、常に最高のライティングが実現できるようにとのコンセプトを基に、ホールのスタッフ関係者とMARUMOの技術スタッフが力を合わせた今回の改修では、客席に対する多彩な演出照明を可能にする設備の新設や、スクロカラーシステムの拡充など、ソフト面での充実が計られました。この新しい舞台照明設備には、ホールのスタッフ関係者が蓄積してきた舞台づくりのさまざまなノウハウが随所にいかされており、舞台での表現の幅を一層大きく広げていきます。



ソニックシティホール

所在地=埼玉県大宮市桜木町1-7-5/設計監理=株式会社 日建設計
設置主体=埼玉県/竣工年月=1988年4月/改修年月=1998年2月

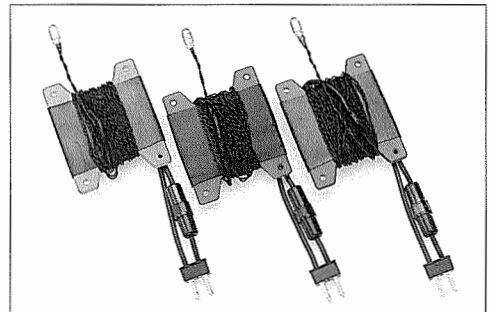
埼玉県内の産業と文化の振興拠点として、JR大宮駅西口に誕生した「ソニックシティ」。その施設のなかでも、大ホール、小ホール、国際会議室が配されたホール棟では、それぞれの施設の特徴をいかして、コンサート、演劇の公演はもとより、イベント、各種大会や学会、講演会などの多彩な文化活動が展開され、その高い稼働率にみられるように、日常生活に根付いた文化施設として、多くの県民に親しまれています。さらに今年は「ソニックシティ」開館10周年を迎え、記念行事として豪華な公演プログラムが生まれ、各種の行事が催されるなど、一層魅力あるホールとして話題を集めています。また、これを機に施設や設備の大規模なリニューアルがおこなわれた二つのホールでは、さまざまな舞台表現に応えるために、MARUMOの最新の舞台照明技術が導入され、より使いやすく、充実した設備が実現しました。



新製品ニュース

星球システム HS-1

簡単な仕込みで、星の輝きを舞台に創り出す星球システムが誕生しました。新しい星球システムは、トランスボックス、星球分配線、星球がそれぞれシステムパーツ化されており、扱いやすく手軽に仕込むことができ、また収納面でのわずらわしさも軽減されました。星球システムは、星球40灯まで対応するトランスボックスと、長さ15mの星球分配線、コード長さ3m、4m、5mをもった星球で構成されており、新しい電気設備技術基準の指針にそった設計で、安全性も配慮されています。



MARUMO LIGHTING NEWS

●「マルモ・ライティング・ニュース」は、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は丸茂電機様までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●発行：丸茂電機株式会社 ●編集：営業部企画課 〒101-0041東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0321 ●発行年月：平成10年6月